

中城村の文化財 第5集

中城村の拝所

2004年3月

中城村教育委員会

中城村の文化財 第5集

中城村の拝所

2004年3月

中城村教育委員会

序 文

本村では、平成5年に『中城村史第三巻 資料編2 教育・文化・考古・雑編』を発行しております。この度、第三巻の補完として『中城村の拝所』を発刊することになりました。主に民俗分野を五年計画で調査して参りますがとりあえず初年度は、拝所を中心とした年中祭祀の様子を調査報告としております。

文化は変化すると言われます。村落の生活文化の核をなし地域住民の結集の場でもあった祭祀、行事等も信仰をめぐる個々の考え方、社会環境の変化、産業構造の変化等時代の変遷とともに移り変わってきております。

特に沖縄県は琉球王国時代、廃藩置県、第二次世界大戦、米国による統治下時代、日本復帰と歴史的な背景により大きく文化が変化してきました。私達は自らの地域を知る上で、また歴史を知る上でも簡略化による変容、伝承者が高齢化により途絶える前に伝統的な祭祀・行事等を文化財的視点から捉え保存伝承し、後世に継承していく責務を担っております。

そのためにも、積極的に地域に出向き歴史的に貴重な、祭祀・行事等が埋もれ去られる事がないよう地域の皆様の協力を得ながら調査を進めて参ります。

この報告書が地域の祭祀、行事を見直し保存伝承していく上で、また地域の歴史文化を知る上での一助になれば幸いです。

終わりに『中城村の拝所』を発刊するにあたり、聞き取り調査から編集に至るまで懇切ていねいに、ご指導ご助言を賜りました本村民俗調査員、仲村春吉先生に衷心より深く感謝を申し上げます。

平成16年3月

中城村教育委員会
教育長 仲 座 盈 助

凡 例

- 1 本報告書は、2002年度に実施した、村内の拝所についての調査記録である。
- 2 各自治会によって村落祭祀(ムラウガン)が行われている、あるいは戦前まで行われていた拝所を主な対象としている。したがって、北浜や南浜、浜、北上原、南上原、登又の屋取地域や、個人単位の拝所は省略している。また、村落単位の拝所か、門中単位のものか、その区別が曖昧な場合には説明を付加して掲載している。
- 3 調査は、各自治会長の協力を得ながら、現在受け継がれている年中祭祀への参与観察と、年長者の方々を中心に聞き取りを行った。
- 4 拝所名については、現在、それぞれの地域で一般的に呼び親しまれている呼称を記し、その漢字表記を()内に、さらに『琉球國由来記』に記載されている名称を「 」内に付加している。
- 5 本文の体裁はまず、各字の拝所分布略図、及び現在行われている祭祀日程を記している。それから、各字の拝所についての説明文を写真とともに掲載している。
- 6 なお、今回の調査では時間の関係上、添石、伊舎堂、泊の古島である中城城跡内と周辺の拝所を取り上げることができなかった。その他にも、所在が確認できず、割愛せざるを得なかった拝所がいくつかあり、今後の課題としたい。
- 7 付録として、『琉球國由来記』にみる中城村の祭場、拝所一覧、拝所分布図を掲載している。拝所分布図は、国土地理院発行の2,500分の1の地図を用いている。
- 8 調査体制は次のとおりである。

調査主体 中城村教育委員会生涯学習課

調査事務 課 長 屋 良 清

” 課長補佐 中 村 美津江

” 主 事 渡久地 真

” 臨 時 前 原 直 子

” 臨 時 徳 村 笑里子

” 委 嘱 仲 村 春 吉

※調査は仲村春吉、前原直子、徳村笑里子、執筆は主に前原が担当した。

- 9 各字の調査協力者は以下のとおりである(敬称略)。心から感謝の意を表したい。

伊 佐 盛 善(新 垣)	瀬名波 芳恵(津 覇)	島 袋 稔(添 石)
安 里 イ ネ(”)	新 垣 隆 永(”)	中 村 盛 吉(”)
伊 佐 善 宏(”)	伊 保 政 慎(奥 間)	比 嘉 秀 雄(”)
伊 佐 善 彦(”)	伊 佐 樽 善(”)	比 嘉 昇(”)
喜舎場 昇(”)	伊 佐 孝 徳(”)	山 田 清 之(伊舎堂)
安 里 徳 昌(”)	喜屋武 盛樽(”)	和仁屋 キヌ(”)
新 垣 弘(伊 集)	新 垣 盛 昌(安 里)	比 嘉 シズ(”)
新 垣 徳 康(”)	新 垣 盛 保(”)	安 里 盛 光(”)
新 垣 武 盛(”)	喜屋武 勲(当 間)	比 嘉 盛 昭(泊)
新 垣 ヤ ス(”)	比 嘉 俊 一(”)	小橋川 盛光(”)
新 垣 忠 市(和字慶)	宮 城 洋 幸(屋 宜)	小橋川 ハル(”)
新 垣 ハ ル(”)	宮 城 清(”)	小橋川 静枝(”)
儀 間 カ ナ(”)	宮 城 仁 徳(”)	
	宮 城 ヤ ス(”)	

目 次

序 文

凡 例

新垣の拝所	7
ウタキ（「新垣ノ嶽」）	8
トゥン（「ウチバラノ殿」）	8
イリヌカー（西ヌ井戸）	8
アガリヌカー（東ヌ井戸）	8
ミージャーガー	9
ワーランガー	9
ナナジョウオハカ（七門御墓）	9
カニマンオハカ（カニマン御墓）	9
ニードウクル（根所）	10
ミーヤ（新屋）	10
ディーグニー	10
（綱引きの祈願所）	10
伊集の拝所	11
ウガン（「伊集ノ嶽」）	12
ユージドゥン（世持殿、「與儀之殿」）	12
ヌンドゥンチ（ノロ殿内、「伊集巫火神」）	12
ヌールガー	13
アガリメヌカー（東前ヌ井戸）	13
ニーヤ（根屋、「與儀根所」？）	13
ヤマグウヌタキ（山小の嶽）	14
ウブガー（産井戸）	14
フナングウ（「フナグラノ殿」）	14
チキンダガー	15
シルドゥングワー（または地頭火の神）	15
和宇慶の拝所	17
ウガン	18
ムラガー（村井戸）	18
ウガンジュ（拝所）	18
氏神様	19
拝所（名称不明）	19

津覇の拝所	21
イーツハノタキ（「上津覇ノ嶽」）	22
フサトノタキ（富里之嶽、「富里ノ殿」）	22
ウトウーシ（遥拝所）	22
トゥングワー（殿小）	23
糸満家（獅子屋）	23
呉屋家	23
奥間の拝所	25
合祀所	26
ムラヒヌカン（村火の神）	26
拝所（名称不明）	26
ウブガー（産井戸）	27
イーマノウタキ（上間の御嶽）	27
（綱引きの祈願所）	27
イービヌメー（「イベノマエノ嶽」）	28
カミジョウウタキ（上門御嶽）	28
トオークマウトウン（「当奥間座敷之殿」）	28
ニーヤ（根屋）	28
安里の拝所	29
トゥングワー（殿小）	30
カー（名称不明）	30
ニーヤ（根屋）	30
カー（名称不明）	31
ムラガー（村井戸）	31
ヤマグワー（山小）	31
当間の拝所	33
ヤマダノトゥン（山田の殿、「ヤン殿内之殿」？）	34
ヤマダノカー（山田の井戸）	34
クボーウタキ（「コバウノ嶽」）	34
ノロードウン（ノロー殿）	35
ナカジョウメーノトゥン（仲門前の殿）	35
イリナカジョウノカー（西仲門の井戸）	35
サチハマノカー（崎浜の井戸）	35

屋宜の拝所	37
タマグスクドゥン（玉城殿、「玉城佐久川ノ嶽」）	38
ジトウドゥン（地頭殿）	38
アガリードゥン（東ヌ殿）	39
イビガナシー（「屋宜港干瀬ノ御イベ」）	39
マーチューグラー	40
ウキンジュガー（受水井戸）	40
フニガー（船井戸）	40
ニーヤ（根家）	41
ヌンドウンチ（ノロ殿地、「屋宜巫火神」）	41
玉城のカミヤ	41
シンブシ	42
サジタイ	42
（シマクサラシーに牛をつないだ場所）	42
カクリジカ	43
チンジャー	43
トーバルのカー	43
 添石の拝所	 45
ムラヒヌカン（村火の神）	46
ウタキ（御嶽）	46
ヌンドウンチ（ノロ殿内）	46
ウフヤ（大屋）	47
ウブガー（産井戸）	47
イリジョウ（西門）	47
 伊舎堂の拝所	 49
オミヤ（お宮、村火の神）	50
伊舎堂安里家	50
ウブガー（産井戸）	51
エードウンチグワ（親殿内小、伊舎堂の殿）	51

泊の拝所	53
ムラヒヌカン (村火の神)	54
リュウグー (竜宮神)	54
ニーヤ (根屋)	54
坊主墓	54
ウフヤ (大屋)	55
グスクウトゥーシ (グスク遙拝所)	55
東門門中のカミヤ	55
棚原門中のカミヤ	55
シチャヌカー (下ヌ井戸)	56
(幻のウブガー)	56
アガリヌカー (東ヌ井戸)	56
ウスデークガー	57
タマウノーシガー	57
イーヌカー (上ヌ井戸)	57
ウフグスクカー (大城井戸)	57
ミルクガー	58
ウヨーグスクヌカー	58
アガリジョウウタキ (東門御嶽)	58
オミヤ (お宮)	58
久場の拝所	59
トゥンナー (「上久場之殿」)	60
ウタキ (「久場ノ嶽」)	60
ウブガー (産井戸)	60
ウガンジュ (拝所)	60

終わりに

参考文献

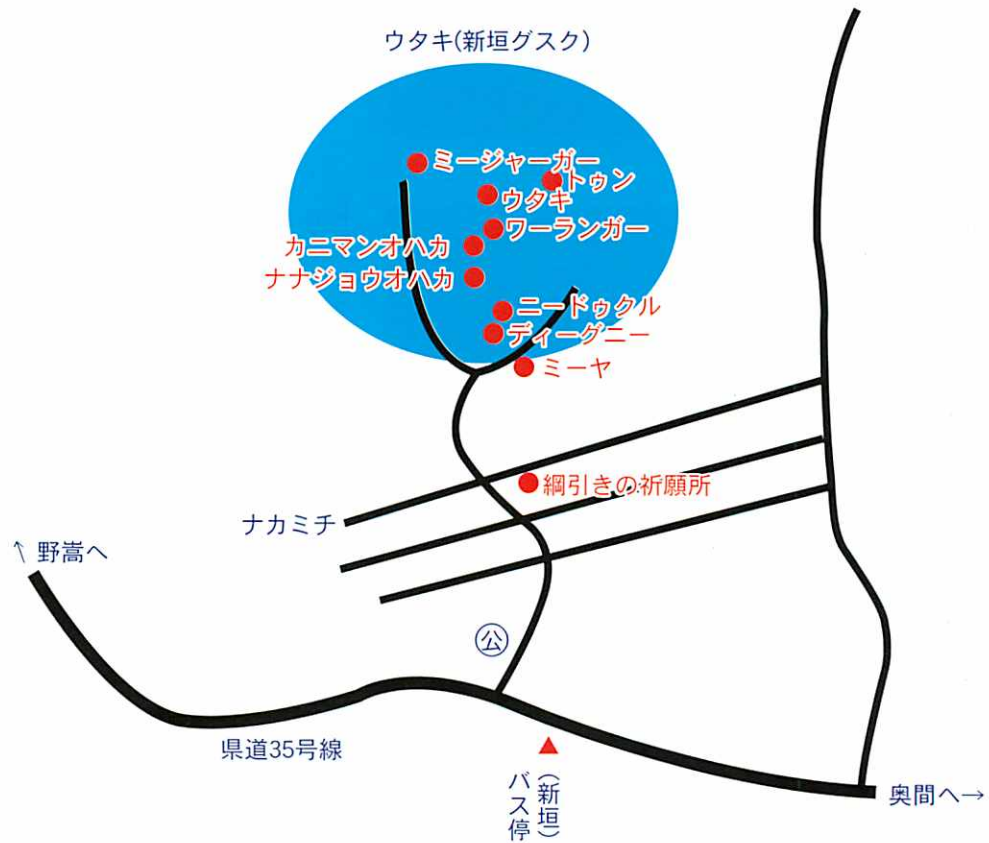
付 録

『琉球國由来記』にみる中城村の祭場

拝所一覧

拝所分布図

新 垣



※現在受け継がれている村落祭祀

ハチウビー	(旧暦 1 月 2 目)
ウマチー	(" 5 月 15 日)
ウマチー	(" 6 月 15 日)
綱引き	(" 7 月 15 日)
カシチー	(" 8 月 10 日)
カママーイ	(" 10 月 1 目)
ウガンブトゥチ	(" 12 月 24 日)



ウタキ（「新垣ノ獄」）

集落北側のもっとも高くなっている一帯に、神木マーニ(クロツグ)で囲まれた4×8mの平場があり、香炉が置かれている。ここを中心にして、周辺の鬱蒼とした場所全体が、地元の人びとからウタキ(御嶽)と総称される神域である。



トゥン（「ウチバラノ殿」）

ウタキから約60m東側に、50坪ほどの平場があり、海石とコンクリートで造られた横4m、高さ2m、奥行き3mの祠が建っている。祠内にはご神体として自然石がいくつか置かれている。戦前まで、5月と6月に行われるウマチーには、この平場に新垣住民が総出で集ったという。現在のウマチーは、区長をはじめ有志の方々が祈願を行っている。ウンサク（神酒）の代用品としてヨーグルトが供えられ、また、かつて女性神役が着けていたという神衣装を置いて拝んでいる門中関係者の姿も見られる。



イリヌカー（西ヌ井戸）



アガリヌカー（東ヌ井戸）

※両井戸はトゥンの西側と東側に位置しており、いずれも石積みで囲まれている。戦前まで豊富にあったという井戸水は現在確認できない。



ミージャーガー

豊かな水量と良い水質から、人びとの生活に深く関わりのある井戸だったと言われている。正月の若水や出産の産水、豆腐造りなどに用いられ、「ミージャーガーの水で顔を洗うと若返る」という伝承もあったという。当初、ミーヤ（新垣の旧家）の犬が発見したため、ミーヤーガーと呼ばれていた。それがミージャーガーになったと伝えられている。

丘陵上部の岩陰から清水が湧き出ており、傍に「昭和二年十月改築」、「字新垣青年團創立十年記念」と刻まれた2つのコンクリート製の碑がある。水道が普及し、水瓶を頭に掛けて歩く女性たちの姿は見られなくなったが、現在でも甘くおいしい湧水として定評を得ている。



ワーランガー

ワーランの意味は知られていない。ミージャーガーとトゥンの中間辺りに位置している。大岩の根本に石積みで囲まれ、水が湧き出ている。



ナナジョウオハカ（七門御墓）

各門中の祖霊神を祀った場所と言われている。香炉の向こう側に岩盤の割れ目があり、奥に入ると祟りがあると恐れられている。かつてはムラシーミー（村清明祭）に祈願が行われたそうである。近年から、旧暦8月10日のカシチーに拝むようになった。



カニマンオハカ（カニマン御墓）

カンジャーヤー（鍛冶屋）と関係があるとか、あるいは、村内で最も裕福だった方の墓であるなどの諸説があり、定かでない。戦前は西側の崖近くにあったが、戦後すぐ崩落してしまい、現在地に移設されたという。大岩の根本に墓らしき石積みが見られる。



ニードゥクル（根所）

村の創始者の屋敷跡と言われている。その住人については知られていないが、戦前まで瓦葺の屋敷跡があったという。現在、コンクリート製の祠と井戸跡、ウーヌフル（豚小屋兼トイレ）跡、入口付近に石畳が残っている。旧暦10月1日にはムラウバギーと称して、根所にウバギーメー（おにぎり）を供え、その1年間に生

まれた子どもの名前を報告することになっている。新垣の集落は戦前まで、ウタキを腰当森にして、根所、旧家、その分家、さらにその分家というように、家屋が末広がりに続いていた。近年、県道沿いに移転する家が増え、根所周辺は無人となった。戦前まで行われていた十五夜のムラアシビ（村遊び）には、根所の庭でさまざまな舞踊が演じられたという。



ミーヤ（新屋）

根所からの分家と言われている。コンクリート製のカミヤ（神屋）と井戸跡が見られる。カミヤ内には位牌や香炉がいくつかあり、旧暦12月7日のムーチーに祈願が行われる。



ディークニー

戦前まで、旧暦12月7日にシマクサラシー（厄除け）の祈願が行われた場所である。マーニの木の根本に香炉らしき自然石が置かれている。その一帯がディークニーと称され、そこでシンメナービ（大鍋）に牛肉を炊いて、集まってくる村人たちに振舞われたという。木々が鬱蒼と茂るなか、牛を殺すのに使ったというデイゴの木が残っている。



綱引きの祈願所

旧盆に綱引きの舞台となるナカミチ（中道）沿いに位置しており、ご神体らしき石は特に見られない。新垣では、子どもらが各戸から萱を集め、青年たちが綱を打つ。上・下両組が松明を灯し、ドラや太鼓を打ち鳴らしつつ、空手が披露され、そして綱が引かれる。

伊 集



※現在受け継がれている村落祭祀

ハチウビー (旧暦 1 月 2 日)

クスッキー (" 2 月 2 日)

獅子舞 (" 7 月 17 日)

十五夜 (" 8 月 15 日)



ウガン（「伊集ノ嶽」）

集落の北方、和宇慶との境に位置する山の中、マーニなどの木々が鬱蒼と茂る場所に祠があり、香炉が3つ置かれている。戦前まで周辺の木々は伐採が禁じられていた。伊集のウガンから100m以内に和宇慶のウガンがあり、前者はイナグ(女)神、後者はイキガ(男)神として知られている。また、近くにチュクサイヌカー（一鎖ヌ井戸）もある。



ユージドゥン

（世持殿、「與儀之殿」）

根屋のウヤファーフジ(始祖)が伊集の地に来た時、すでに空き家としてあった、「伊集ヌシー」の屋敷跡だと言われている。集落の西方、ギンネムの木で覆われたモーエと呼ばれる小高い山の麓に位置しており、コンクリート製の建物内に、自然石数個と3つの香炉が置かれている。近くにはチュクサイヌカーとして、メーヌカーとカンナガーがある。



ヌンドゥンチ

（ノロ殿内、「伊集巫火神」）

ユージドゥンから約20m東側にある。戦災で瓦葺の拝殿が焼失した後、コンクリート製に改築されたらしく、ノロ火の神と4つの香炉（ウサチ・ナカ・イマ、久高島への遥拝^{ウトウシ}）、獅子が安置されている。敷地の中央部はアシビナーと呼ばれ、戦前までそこに舞台もあり、盛大なムラアシビが行われたという。



ヌールガー

アンライガーとも呼ばれる。ヌンドウンチの北西、畑中に位置している。ノロが髪を洗った井戸として知られ、クチャ（シャンプー代わりに利用した土）を水に溶く際に使ったという丸いくぼみのある自然石が残っている。



アガリメヌカー (東前ヌ井戸)

道端にコンクリート製の井戸があり、水は枯れていて、石灰岩で造られた香炉が置かれている。ノロ殿内との関わりがあり、旱魃の際に使われた井戸と言われている。



ニヤ (根屋、「與儀根所」?)

新垣家（屋号：アガリ）の一角にカミヤ（神屋）があり、火の神とガンス（元祖神）、観音様などが祀られている。新垣家は村の創始者として、現戸主の祖父の時代まで根人（ニーチュ）と根神（ニーガン）がおり、村落祭祀に主導的な役目を担ってきたという。伊集にあるほとんどの拝所は、この新垣家が管理している。

ウニウフグシク
る。鬼大城（大城賢雄。生没年未詳。尚泰久王〈在位1454～60〉に仕えた武将）の末裔と言われている。



ヤマグワースタキ（山小ノ嶽）

根屋（アガリ）が最初に屋敷を構えた場所と言われている。現在の公民館敷地内に位置しており、戦前までその一帯は、ヤマグワ（山小）と呼ばれていた。コンクリート製の祠に3つの香炉（天の神・土の神・火の神）と自然石が安置されている。



ウブガー（産井戸）

伊集では唯一カブイ（アーチ状の石積み）を残した井戸である。戦前まで、子どもが誕生した際の産水や正月の若水として利用されてきた。



フナグワ（「フナグラノ殿」）

竜宮神、航海安全の神様と言われている。この一帯はフナグワ（船倉）と呼ばれ、かつての海岸線で船着場だったという。コンクリート製の祠に香炉と自然石が置かれている。



※竜宮神の西側に、ウマクンジャーと呼ばれる岩がある。^{ボージウシュウ}坊主御主と呼ばれた第二尚氏王統の17代、尚灝王（在位1804年～1834年）が伊集村に立ち寄った際に馬の手綱を結び付けておいた岩と伝えられている。坊主御主は、伊集のヒジャナビーメー（比嘉ナベさん）との恋愛が知られており、彼女の子孫に当たる方々がここを拝所として祈願するようになったという。



チキンダガー
(津喜武多井戸)

津喜武多按司（按司時代に西原町幸地に城を構えた）と関わりがある井戸と思われるが、定かでない。戦後、草むらに埋もれていたところを字民によって探し出され、コンクリートで修復された。井戸水は戦前まで、稲作に利用されていた。伊集で初めて稲作が行われたという田んぼもこの近くにあったと言われている。



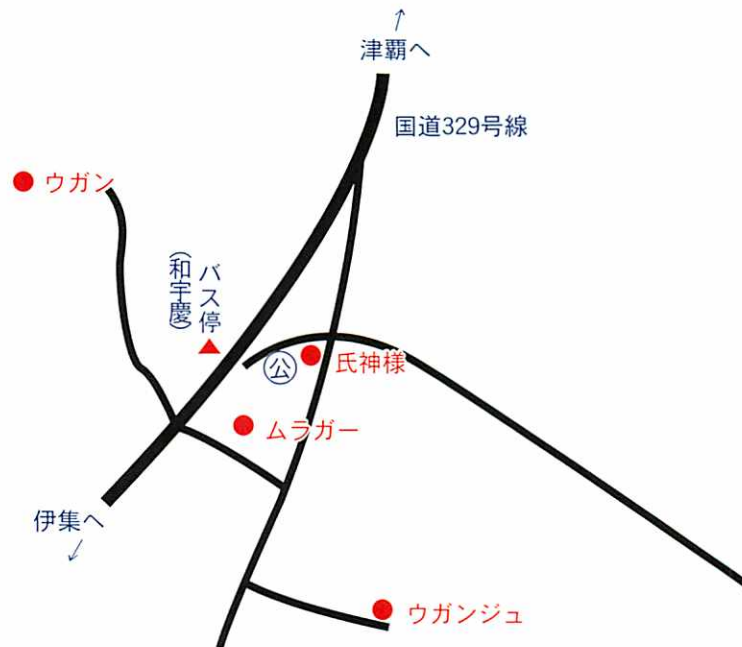
シルドゥングワー
(または地頭火の神)

フジトウ
夫地頭の屋敷跡であると言われている。コンクリート製の祠（1973年10月28日修復）のなかに、香炉と3つの自然岩がある。近くには、チュクサイヌカーもある。



チュクサイヌカー

和 宇 慶



※現在受け継がれている村落祭祀

ハチウクシー (旧暦1月3日)

盆 (" 7月17日)

十五夜 (" 8月15日)

クンガチクニチ (" 9月9日)

ウガンフトゥチ (" 12月24日)



ウガン

伊集のウガンから北側、わずか100メートルの距離にある。この一帯が和字慶集落の発祥地と言われている。



ムラガー（村井戸）

畑のなかにあるコンクリート製の井戸跡。和字慶で最初の井戸と言われている。ウガンへの遙拝もこの井戸から行っている。写真は十五夜の祈願の様子。



ウガンジュ（拝所）

慰霊の碑、火の神、中軸の井戸、安里御井戸、ビジル、世利井戸、外間井戸などが合祀されている。戦前まで、和字慶の集落はこの統合拝所のある畑地に位置していた。1944年、日本軍によって飛行場が建設され、戦後は引き続き米軍によって約10年間、訓練用の飛行場として使用された。現在の住宅地は、それまで農地

だった場所を部落が字有地として買い上げ、それを各世帯に70坪ずつ割り当てたものである。住民は、飛行場跡のコンクリートを壊してそこに畑を開墾し、また、そのコンクリートで屋敷囲いを造って新しい家を建てたという。「慰霊の碑」建立の際、旧集落跡地に残っていたいくつかの井戸は鏡を入れて埋められ、お坊さんに祈願をしてもらい、一カ所に合祀された。1983年建立。



氏神様

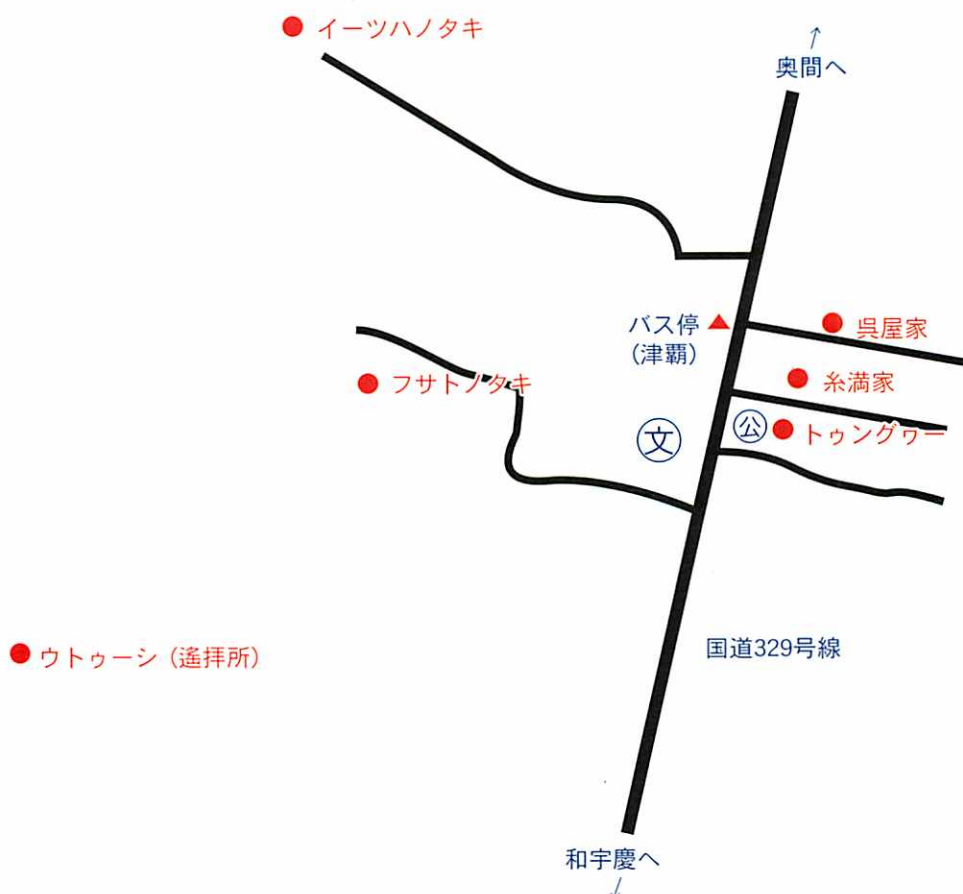
詳しいことは不明。戦前、旧公民館敷地内にあったものをそのまま、現公民館敷地内に移したそうである。



拝所（名称不明）

名称や性格等は不明。戦前は大木の根本に香炉だけがあったそうである。

津 覇



※現在受け継がれている村落祭祀

ハチウビー	(旧暦 1 月 2 日)
海神祭	(" 3 月 3 日)
ウマチー	(" 3 月 15 日)
ウマチー	(" 5 月 15 日)
ウマチー	(" 6 月 15 日)
盆	(" 7 月 15 日)
十五夜	(" 8 月 15 日)
クンガチクニチ	(" 9 月 9 日)
ウガンブトゥチ	(" 12 月 24 日)



イーツハノタキ (「上津覇ノ嶽」)

上津覇門中の古代居住地跡と言われている。「上津覇拝所 建立昭和五十九年十二月」と記された祠に自然石と香炉が置かれている。津覇の集落は、上津覇、富里、糸蒲の3門中により形成されていった。



フサトノタキ (富里之嶽、「富里ノ殿」)

富里門中の古代居住地跡と言われている。津覇小学校運動場の西方、丘陵上にモクマオウが生い茂った平場があり、「富里拝所 昭和61年12月28日」と刻まれた祠がある。



ウトウシ (遙拝所)

「ハンタ道」沿い、この一帯はイトカマと呼ばれ、糸蒲門中の古代居住地跡と伝えられている。コンクリート製の香炉が並んでいて、それぞれイトカマウタキ(「糸蒲ノ嶽」)、シージマタ(「シキマタノ嶽」)、イトカマのテラ(「糸蒲寺院」)への遙拝所と言われている。糸蒲門中は、西原の棚原グスクとの戦に敗れ、イト

カマの丘陵に逃れ、そこで一時生活した後、より住みやすい平地へと下りていったらしい。イトカマの地にいた頃、付近に水が乏しかったため、500m西方のシージマタ(琉球大学敷地内の溜池付近)まで水を汲みに行っていたと言われている。また、イトカマのテラについては、『琉球國由来記』に、かつてその地に寺院があり、補陀落僧が不動明王を祀っていたことが記されている。坊主とヨキヤノロとの関わりや、田芋の発祥地としての記述が興味深い。



トウングワー（殿小）

旧公民館敷地の一角にコンクリート製の祠がある。昭和45年に改築する以前は、木々が鬱蒼とした場所に小さな祠だけがあったという。旧正月や旧盆、十五夜には獅子舞が奉納される。



糸満家（獅子屋）

新垣家の一角にカミヤがあり、獅子が祀られている。旧正月や旧盆、十五夜には獅子が奉納される。

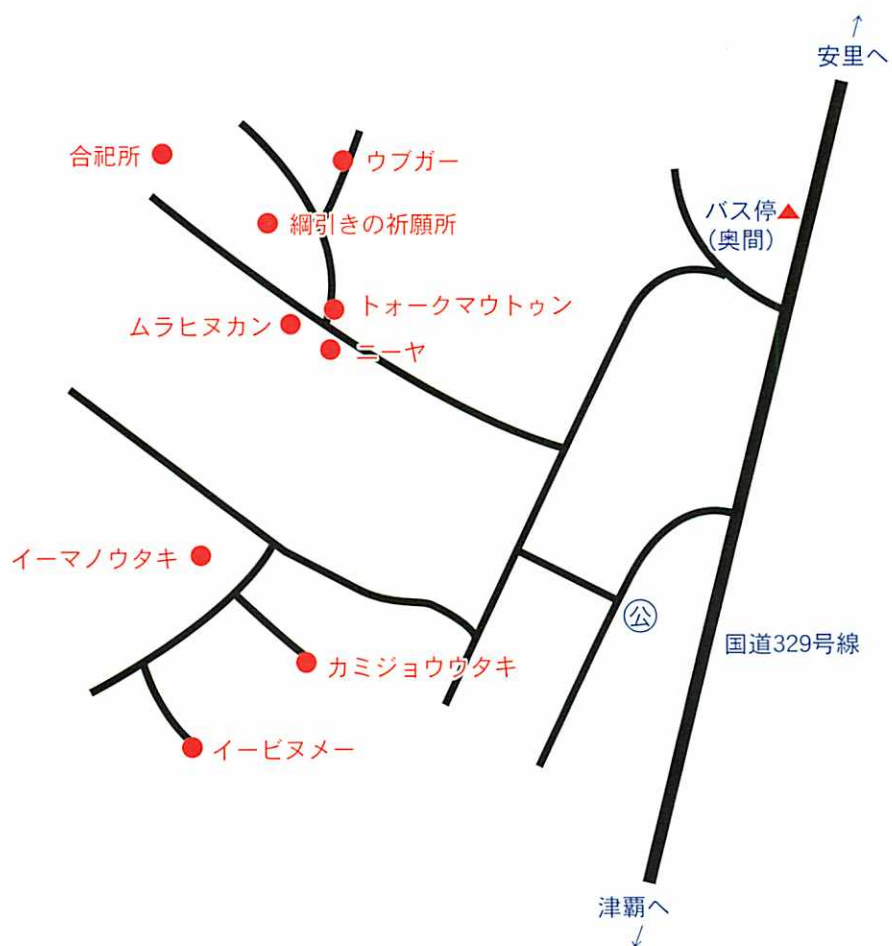


呉屋家

呉屋家の一角にカミヤ（神屋）がある。旧正月や旧盆、十五夜には、ここでの祈願を終えた後、道ジュネーが出発する。



奥 間



※現在受け継がれている村落祭祀

ハチウビー (新暦1月1日)

子ども綱引き (旧暦7月17日)

十五夜 (" 8月15日)



合祀所

鬱蒼と木々が生い茂るなか、破風墓のような形をしたコンクリート製の拝所がある。1970年頃、チナーヤマ(喜名山)の土砂崩れにより、チナーウタキ(「喜名御嶽」)とサムライ墓が流された。その後、北上原にあるシマクヌウガン(「キシマコノ嶽」)への遙拝所とともに合祀されたものであると言われている。

チナーヤマ(喜名山)は戦前まで、根人の方が管理していたらしい。平日に木々を伐採することは禁じられ、年に一度の特定日しか入れなかったという。山の麓にチュクサイヌカーがある。また、サムライ墓(侍墓)は、崩れる以前はチナーウタキの上方に位置していたと言われる。武寧王の墓として、他地域から参拝しに来る者が絶えないそうである。シマク御嶽(「キシマコノ嶽」)は、北上原の山中に位置しており、奥間集落発祥の地として知られている。



ムラヒヌカン (村火の神)

ゲートボール場の一角にコンクリート製の祠があり、3つの自然石と香炉が置かれている。戦前、周辺一帯はトゥンナー(殿庭)と呼ばれ、旧公民館があったという。トゥンナーでは、戦後もしばらくまで獅子舞などが演じられたそうである。



拝所 (名称不明)

ゲートボール場(火の神)の西側、約6×3.4mの平場にマーニが生えており、その中央部に自然石が見られる。戦前、旧暦9月9日に菊酒を供えて祈願した場所、また、牛を殺してシマクサラシー(厄払い)を行った場所と言われている。



ウブガー（産井戸）

産水として利用されていたと言われている。屋敷間にあるコンクリート製の井戸で、現在は農業用水として使われている。



イーマノウタキ（上間の御嶽）

奥間では戦前、旧盆ウークイに盛大な綱引きが行われていた。集落の中心を通るナカミチ（中道）から南をメーベー（前組）、北をクシベー（後組）と分け、上間の御嶽は前組の祈願場所だった。現在も子ども綱引きの前に祈願が行われている。小公園の北側、海石でできた横1.1m、高さ0.5m、奥行き0.8mの祠があり、自然石が置かれている。



（綱引きの祈願所）

後組の祈願場所で、上間の御嶽とほぼ同型である。



イービヌメー

(「イベノマエノ嶽」)

「中城王子の墓」としてシーミーにそこを拝んでいる方々もいるが、詳細は不明。マーニが生い茂るなか、祠(写真左)や火の神(写真右)などがある。



カミジョウウタキ

(上門御嶽)

戦前まで、屋宜ノロの祈願によってウマチーが行われた場所と言われている。草木に囲まれた平場に海石でできた横0.7m、高さ0.6m、奥行き0.95mの祠がある。木の根によって崩れている。



トオークマウトウン

(「当奥間座敷之殿」)

ゲートボール場の東側に、横1.2m、高さ0.9m、奥行き0.7mのコンクリート製の祠がある。なかに自然石があり、手前に香炉が置かれている。



ニーヤ(根屋)

伊佐家の一角にカミヤ(神屋)があり、左側から火の神、仏壇、観音様が祀られている。5月と6月ウマチーには各地から多くの参拝者が集まる。